宣長の新古今集注釈における本歌認定

――手沢本『新古今和歌集』書入と『美濃の家づと』の相違に着目して

藤井嘉章

キーワード：本居宣長、新古今和歌集、本歌取、手沢本、美濃の家づと

はじめに

本居宣長の本歌取歌解釈については、高橋俊和が「本歌の詞を本歌の中の意味・情を含んだものとして採用するという本歌取りの態度」(1)と規定した。筆者はこの指摘を受け継ぐ形で『草庵集玉箒』及び『美濃の家づと』（以下、『美濃』）を対象に宣長の本歌取歌解釈のより細かな分析的視点の諸相を次のように析出した(2)。

（A）本歌の詞の意味内容を変容させて新歌に利用する本歌取
（B）本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取
（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取
（D）本歌に応和する本歌取
（E）心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取
（F）本歌の詞を同系統の別の詞に置き換える本歌取
（G）本歌を二首取る本歌取
（H）縁語的連想による本歌取
（I）本歌の趣向を変えない本歌取／本歌の詩句と変わらない本歌取
（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取

この結果を踏まえ、特に石原正明『尾張廼家苞』（以下『尾張』）における本歌取解釈を、寺島恒世の「本歌取は詞をとる技法であり、それ以上の複雑な技巧は否定される」(3)という宣長とは相対立する性格規定を参照し「詞を取る本歌取」としたうえで、宣長の本歌取歌解釈の傾向性を「心を取る本歌取」と規定した。また（H）縁語的連想による本歌取を析出したことから、野口武彦・渡部泰明ら(4)に指摘されてきた宣長における縁語を通じた詞の秩序の重視を、本歌取歌解釈の実践の中で再度、指摘した(5)。

本稿では以上を踏まえた上で、本居宣長記念館所蔵宣長手沢本『新古今和歌集』における書入（以下、「宣長手沢本書入」）本歌と、『美濃』における本歌取歌への評釈において認定された本歌の異同についての定量的な分析から始めて、宣長による本歌の選定と、本歌取歌解釈における意味内容の読み込み、及び修辞表現に関する態度の傾向性を定性的に分析する。

第一節　本歌認定の定量分析による傾向性

まずは「宣長手沢本書入」と『美濃』との本歌認定の関係について定量的な事実を確認しておく。

「宣長手沢本書入」ついては、『美濃』において本歌取として解釈さ

れる新古今歌一七二首に対する書入を翻刻し、その際、「宣長手沢本書入」の大部分が『新古今和歌集』への契沖による書入（以下、「契沖書入」）の引き写しであること、しかし一定数において「契沖書入」の内容と一致しないこと、及び『美濃』における本歌認定とも一定数が一致しないことを確認している(6)。それゆえ、「宣長手沢本書入」と『美濃』における本歌の異同の分析を、事前に析出した本歌取歌解釈の分析的視点を通じて行うことで、「宣長手沢本書入」から『美濃』において本歌認定の変更が行われた際に、どのような分析的視点が採用される傾向にあるのかを明らかにすることができると考えられる。

田中康二が明らかにしたように(7)、『美濃』は、東常縁『新古今集聞書』（以下、『聞書』）・細川幽斎『増補新古今集聞書』（以下、『増補聞書』）の古注、加藤磐斎『新古今増抄』（以下、『増抄』）・北村季吟『八代集抄』の旧注、及び「契沖書入」の新注を批判的に受容して自らの評釈を記述しているが、「宣長手沢本書入」は先に述べた通り、「契沖書入」の影響が最も強い。

この事実を踏まえて、本稿での分析の対象を明確化する。『美濃』は『新古今和歌集』から六九六首を抄出し評釈を加えたものであり、その内、本歌取歌として解釈されている新古今歌は一七二首を数え上げることが出来る。その中から「宣長手沢本書入」・「契沖書入」・『美濃』における本歌の指摘においてそれぞれの組み合わせの中に一つでも異なるものがあるという基準を設けると、計七〇首の新古今歌を抽出することができ、これを本稿での主要な分析の対象とする。当該七〇首の内、「宣長手沢本書入」と『美濃』の評釈との本歌が一致しないものは五七首、「宣長手沢本書入」と「契沖書入」とが一致しないものは二九首を数える。その重複は十六首である。

分析の対象とした新古今歌七〇首と、それぞれに対する「宣長手沢本書入」、「契沖書入」、『美濃』における言及された先行歌を『新編国歌大観』の歌番号に基づいて次表で示した。さらにそれら先行歌に対して東常縁『聞書』、細川幽斎『増補聞書』、加藤磐斎『増抄』、北村季吟『八代集抄』における言及の有無を、それぞれ「常」「幽」「磐」「季」の略記号で示した。「『美濃』分析視点」の欄に掲載したアルファベットは前掲の本歌取歌解釈の分析的視点の記号に従う。「B→CJ」のような表記は、「宣長手沢本書入」の段階では「B」だと解釈されるものが、『美濃』において「CJ」へと移行したことを示す。分析的視点の判断は筆者。

歌番号	歌人名	宣長書入本歌典拠	契沖書入本歌典拠	『美濃』本歌典拠	その他注釈書	『美濃』分析視点
52	式子内親王	拾遺1006	拾遺1006			B→CJ
				源氏真木柱	常・幽・磐・季	
59	藤原俊成			古今221	磐・季	C
98	藤原有家	万葉495	万葉495(本)	万葉495	常・幽・磐・季	BH
		壬二集2102				
135	後鳥羽上皇			古今63	磐・季	AB
136	藤原良経			古今63	磐・季	C
169	寂蓮法師	貫之集286	貫之集286			H
		貫之集341	貫之集341			
				古今311	常・幽・磐・季	
179	藤原俊成	注釈	注釈			BBG
		古今797		古今797	磐	
				古今795	季	
254	藤原定家	古今968	古今968(本)	古今968	幽・磐・季	J
		新古今385	新古今385			
256	式子内親王	和漢朗詠151	和漢朗詠151	和漢朗詠151	磐・季	Eの視点の消滅
		万葉4315	万葉4315(本)			
258	慈円	古今序	古今序			B
		古今404	古今404(本)	古今404	磐・季	
293	藤原良経	伊勢123段	伊勢123段			I
		古今969	古今969	古今969	幽・磐・季	
301	藤原俊成	夫木2530				C
			万葉1634(本)	万葉1634		
320	藤原俊成		後拾遺242	後拾遺242		H
349	式子内親王	古今242			幽・磐・季	B→CJ
		拾遺770	拾遺770	拾遺770		
363	藤原定家	源氏明石		源氏明石	磐・季	本歌との関係の指摘無し
		紫式部日記				
366	鴨長明	古今93	古今93	古今93	磐・季	評釈無し
		雲葉集703	雲葉集703			
368	式子内親王	小町集95	小町集95			J(序詞)
				伊勢32段	幽・磐・季	
380	式子内親王	古今947	古今947	古今947		B
		新勅撰225	新勅撰225			
412	源通光			万葉1747		H
478	藤原良経	古今248	古今248			B→CJ
		古今747	古今747	古今747	常・幽・磐・季	
484	式子内親王			和漢朗詠345	常・幽・磐・季	本歌との関係の指摘無し
493	源通光	夫木5376	夫木5376			J
		夫木5381	夫木5381			
				後拾遺324		
515	俊成卿女	源氏帚木	源氏帚木	源氏帚木	季	評釈無し
		続千載501	続千載501			
517	後鳥羽院	後拾遺273		後拾遺273	季	評釈無し
522	寂連			新古今620	磐	H
532	藤原定家	古今250		古今250	幽・磐・季	C
562	七條院大納言	古今六帖915				評釈無し
				後撰1240	幽	
614	後鳥羽院	源氏須磨　注釈		源氏須磨　注釈	幽・磐・季	G
		元真集189	元真集189(本)	元真集189		
617	俊成卿女	源氏花宴	源氏花宴(本)	源氏花宴		G
		狭衣		狭衣	幽・磐・季	
635	藤原良経	源氏朝顔	源氏朝顔(本)	源氏朝顔		本歌との関係の指摘無し
		六百番461	六百番461			
639	藤原家隆	後拾遺419	後拾遺419(本)	後拾遺419	幽・磐・季	B
		拾遺242	拾遺242(本)			
652	藤原雅経	万葉2433	万葉2433			B
		古今522	古今522	古今522	磐・季	
740	寂蓮法師	古今909		古今909	磐・季	CJ
746	藤原良経	古今983	古今983(本)	古今983		AF
		定家八1749	定家八1749(本)			
829	藤原良経	後拾遺564	後拾遺564(本)			C
		千載835	千載835			
		源氏若紫	源氏若紫	源氏若紫	季	

歌番号	歌人名	宣長書入本歌典拠	契沖書入本歌典拠	『美濃』本歌典拠	その他注釈書	『美濃』分析視点
964	鴨長明			古今987	幽・磐・季	本歌の詞の摂取が少ない
973	藤原家隆	万葉2651	万葉2651（本）	万葉2651		A
		月清集1094	月清集1094			
982	藤原定家			伊勢9段		散文からの摂取
1073	藤原良経	新古今1071	新古今1071（本）	新古今1071	常・幽・磐・季	B
		古今472				
		注釈	注釈			
1117	藤原定家	後拾遺744	後拾遺744（本）			AB
		新古今1210		新古今1210	幽・磐・季	
1118	寂蓮法師	古今628		古今628	無	ABG
				古今650	季	
1119	藤原良経	後撰960	後撰960（本）	後撰960	季	CG
		古今650	古今650（本）	古今650	季	
		拾遺愚下2633	拾遺愚下2633			
		注釈	注釈			
1141	藤原良経	後拾遺1162		後拾遺1162	幽・磐・季	ABG
		後拾遺1163		後拾遺1163	幽・磐・季	
			きふねはたきりておつる（本）			
1203	藤原秀能			古今691	季	DG
				拾遺782		
1204	式子内親王	古今693	古今693（本）	古今693	常・幽・磐・季	本歌との関係の指摘無し
		千五百番2427				
				古今690	幽・磐・季	
1273	藤原良経	拾遺908	拾遺908（本）	拾遺908		評釈無し
		古今528		古今528		
1277	藤原有家	古今691	古今691（本）		磐・季	C
				拾遺470		
1281	藤原秀能			拾遺470		C
1285	俊成卿女	古今770		古今770	幽・磐・季	本歌との関係の指摘無し
1286	二条院讃岐	後拾遺1007	後拾遺1007	後拾遺1007		B
		新続古今1213	新続古今1213			
1288	源通光	源氏夕顔	源氏夕顔		幽・季	H
		源氏蓬生		源氏蓬生	常	
1300	権中納言公経			伊勢69段	季	CG
				古今646	季	
1315	藤原雅経	古今516		古今516	幽・磐・季	B
1317	藤原秀能	新古今1499				CJ
				新古今1013		
1320	藤原定家	古今六帖1050	古今六帖1050（本）	古今六帖1050		H
		古今782	古今782（本）			
1324	藤原定家	後拾遺707	後拾遺707			本歌との関係の指摘無し
		後拾遺818	後拾遺818（本）	後拾遺818		
1326	俊成卿女	此詞つかひ女の歌に	此詞つかひ女の歌に	契沖が、女の歌めかずといへるは、いと心得ず		GH
				後撰771		
				古今609		
1328	式子内親王	古今797		古今797	季	C
1331	権中納言公経	源氏明石		源氏明石	季	本歌との関係の指摘無し
1332	藤原定家	新古今1716	新古今1716（本）			G
		源氏須磨	源氏須磨	源氏須磨		
		万葉536	万葉536	万葉536		
		後撰758				
				伊勢15段	幽・磐・季	
1333	藤原雅経	詞花303		詞花303	常・幽・磐・季	H
1455	藤原定家	新勅春下110	新勅春下110			H
		続古今1530	続古今1530			
		注釈	注釈			
				金葉556		
1466	藤原雅経			新古今108		本歌との関係の指摘無し
					古今950　季	
1469	慈円	拾玉4787	拾玉4787			本歌との関係の指摘無し
		千載75	千載75			
		後拾遺43		後拾遺43	季	
1519	藤原良経	古今691		古今691	季	J
1522	藤原秀能	古今184	古今184（本）	古今184	磐・季	I
		狭衣	狭衣			
1659	西行	新古今1720		新古今1720	常・幽・季	評釈無し
1661	慈円			新古今1620	季	H
1803	藤原俊成	文選	文選			本歌との関係の指摘無し
		源氏橋姫	源氏橋姫	源氏橋姫		
		源氏葵	源氏葵			
		古今六帖2553	古今六帖2553			
1939	寂蓮法師	往生要集	往生要集			CJ
				新古今757	季	

以上に一覧した七〇首のうち『美濃』において本歌取解釈についての言及を見出せないものを除き、前掲の本歌取歌解釈の分析的視点に沿って『美濃』における本歌取歌解釈を数量順に列挙すると以下のようになる。

（C）十六首
（B）十三首
（H）十一首
（G）十首
（J）十首
（A）六首
（I）二首
（F）一首
（D）〇首
（E）〇首

（B）「本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取」に比べて（C）「本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取」の解釈が若干ではあるが数的に上回っている点、及び次節で詳しく検討するように「宣長手沢本書入」から『美濃』に至る過程で（B）から（C）へ解釈が変更されたとみなせる歌が三首見出せることは、宣長が本歌取歌を本歌の詩的世界を新歌にも積極的に読み込んで解釈する傾向にあることを示している。次に（G）「本歌を二首取る本歌取」は形式的な基準でありここではさしあたり除外すると、相対的に優位な数量を示している（H）「縁語的連想による本歌取」十一首、及び（J）「摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取」十首という結果から『美濃』において、以上の二つの視点を重視していることを見て取ることが出来る。

以上の定量的な分析結果を前提とした上で、次節以降は「宣長手沢本書入」と『美濃』との本歌認定の相違が認められる新古今歌評釈の定性的な分析に移る。先に示した定量的有意性に鑑みて、第二節では「心を取る本歌取」を代表する（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取と（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取の視点から分析できる『美濃』の評釈を対象とし、第三節では縁語に関する（H）「縁語的連想による本歌取」の視点から分析できる『美濃』の評釈を対象とする。第四節ではその他、定量的な有意はないものの、「宣長手沢本書入」という資料を介することで宣長の本歌取歌解釈の特質を浮かび上がらせることが可能となる個別の評釈についての分析を行う。

第二節　「心を取る本歌取」への傾向

『美濃』において見出される宣長の本歌取歌解釈の特徴が、石原正明『尾張』の解釈との対比において「心を取る本歌取」にあることを先に述べた。本節では、その「心を取る本歌取」を代表する（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取と（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取が、宣長の本歌取歌解釈において好まれる傾向にあることを、「宣長手沢本書入」と『美濃』との本歌認定の相違の分析を通して明らかにする。まず、新古今四七八番歌（秋下・藤原良経）を参照しよう。

和歌所歌合に月下擣衣
里はあれて月やあらぬと恨みてもたれ淺ぢふに衣うつらん

いとめでたし、詞もいとめでたし、二の句は、かの〳〵春や昔の春ならぬ云々の歌の意にて、昔を忍ぶよし也、三の句でもは、常のてもとは意異にして、もは軽くそへたる詞にて、只恨み

てといふこと也、此格のもの。もじ、例有ことなり、然るを恨みながらもといふ意に注したるは、いみしきひがことなり、一首の意は、里はあれて、浅茅生になりたる宿に、月夜にきぬたの音のするを聞て、誰ならん、さぞ月やあらぬ云々、と恨みてぞうつらんと、あはれに思へるなり、

この良経詠に対して、『美濃』では古今七四七番歌を本歌としており、伝統的な注釈、並びに現代の代表的な注釈もこれに従っている。一方で「契沖書入」では古今七四七番歌と共に古今二四八番歌が掲げられており、「宣長手沢本書入」もこれを踏襲している。今両首を挙げる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして
（古今・恋五・在原業平・七四七）

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる
（古今・秋上・遍照・二四八）

「契沖書入」・「宣長手沢本書入」が言及する古今二四八番歌は、里はあれ、その宿に住んでいる者も年老いて、宿は野のようになった、という趣意を持つ。古今二四八番歌を本歌とすれば、「里はあれて」という同一の歌境を共有しながらも、新歌では男に打ち捨てられた女が衣を擣つという悲哀が主想となっていることがわかる。すなわち、古今二四八番歌を本歌と考える「契沖書入」、及び「宣長手沢本書入」の段階では、良経詠を（B）本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取の視点から、本歌と新歌を関係づけるような解釈があり得たと考えられる。

一方で古今七四七番歌のみを本歌としている『美濃』の注釈に従うならば、「二の句は、かの〳〵春や昔の春ならぬ云々の歌の意にて、昔を忍ぶよし也」と述べるように、当該本歌の一部の詞を摂取することで、その歌の全体の趣意を新歌に読み込む解釈を示している。これは本論で（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取として分析し得る視点である。その上で、一首の趣意として「里はあれて、浅茅生になりたる宿に、月夜にきぬたの音のするを聞て、誰ならん、さぞ月やあらぬ云々、と恨みてぞうつらんと、あはれに思へるなり」と述べるように、男に打ち捨てられた女が荒れた故郷で、古今七四七番歌を呟きながら、砧を打っている様が主想とされている。作中の登場人物が本歌となる歌を口ずさんでいるという情景は、新歌の詩的世界の中に本歌が含まれていることが前提となっていることから（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取としての解釈を取っていることがうかがえるのである。

それゆえ当該良経詠における「宣長手沢本書入」から『美濃』への本歌認定の相違を通してうかがえることは、（B）本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取としての良経詠を解釈する方向性を示している「宣長手沢本書入」に対して、（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取と（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取という解釈を『美濃』は採用したことを示しているのである。

以上は、古今二四八番歌と古今七四七番歌とのいずれか一方を本歌とした場合に見て取れる解釈の態度変更である。その上で、「宣長手沢本書入」には古今七四七番歌も書き入れられており、文献上の異同として見るならば、『美濃』では古今二四八番歌が削られたということになる。ここで当該新古今歌に対して古今七四七番歌のみを本歌として考える東常縁『聞書』に次のような注釈のあることが注目される。波線は筆者。

月やあらぬとは彼中将の西の台にて后の住給はぬまたの年の春思ひ出て行てみれば、むかしにも似ずあれはてゝ侍るに月独何心な

くすめるを見て、月やあらぬと読る心を此茅屋に思合てあれたる里とはうらみながら、又行べきかたも侍らず残りゐて衣をうちたる心かすかにあはれなる哥なり。秋のよのいねがてなる月にむかひゐたる折しもかなしく砧の音のすめるを聞て、西台の事を思ひ出給ひし御心おそろしき事なり。姿詞長高く感情かぎりなき御哥也。

波線を付した箇所で述べられているのは、古今七四七番歌（『美濃』の本歌）に「荒れ果てた」という歌境が含まれているということである。その歌境を引き継ぎながら良経詠では衣を打つ女のあわれさが詠まれているとしている。この常縁の解釈を援用するならば、「里はあれて」という趣意を喚起するのに古今二四八番歌（「宣長手沢本書入」の本歌）を引く必要はなく、古今七四七番歌にその意が含まれているということになる。当該良経詠に関して宣長が『聞書』の解釈をどこまで参考にしたのかは詳らかではないが、仮に『聞書』の解釈を踏まえて古今七四七番歌から「里は荒れて」の趣意を引き出し、詞の上でも摂取しているという意識を持っていたのならば、良経詠「里はあれて月やあらぬと恨みてもたれ浅ぢふに衣うつらん」は（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取として解釈されている色彩がより濃くなると考えることができる。

続いて新古今一二七七番歌（恋四・藤原有家）に関する本歌認定の異同を見よう。

千五百番歌合に

忘れじといひしばかりの名残とてその夜の月はめぐりきにけり

めでたし、〳〵わするなよ程は雲井に云々、此本歌の初句も、わするなよ我も忘れじと、たがひにいへる意こもりたれば、それをとりて、わすれじとといひても、たがへることなし、二の句のばかりは、月の所へもひゞきて、おのづからその夜の月ばかりはといふ意に聞ゆ、

『美濃』では拾遺四七〇番歌を本歌として認定している。まずはこちらの本歌取解釈から検討しよう。

わするなよ程は雲井に成ぬとも空行月の廻あふまで

（拾遺・雑上・読み人知らず・四七〇）

有家詠について、本歌とする拾遺歌の初句「わするなよ」が新歌では「忘れじと」と取りなされている。この初句の取りなしについて宣長は、本歌の初句「わするなよ」に「わするなよ我も忘れじ」という「たがひにいへる意」が含まれているとしている。つまり有家詠で本歌初句を「忘れじと」と詠みかえたとしてもその一言に、「わするなよ我も忘れじ」という作中主体の相手への願望と自らの決意という趣意が同様に含まれていると宣長は見るのである(8)。宣長が「此本歌の初句も、わするなよ我も忘れじと、たがひにいへる意こもりたれば、それをとりて、わすれじとといひても、たがへることなし」というのは、そのことを述べているのである。この解釈は明確に（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取を示している。

さらに注釈の後半部では「二の句のばかりは、月の所へもひゞきて、おのづからその夜の月ばかりはといふ意に聞ゆ」と述べる。本歌では「空行月の廻あふ」ように二人もまた再びめぐり逢うことが願われていたが、新歌では「その夜の月ばかり」と解釈されることで、すなわち相手は訪れず、月だけが巡ってきたものとされる。本歌の詩的世界において願望された相手の訪れが、新歌では叶わなかったという趣意として解釈されていることがうかがわれ、（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取という視点を見出すことができるだろう。すなわち『美濃』において新古今一二七七番の有家詠は、（J）

摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取に基づく（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取として解釈されていると考えることができる。

それでは「宣長手沢本書入」の段階では本歌はどう考えられていたのであろうか。「宣長手沢本書入」では「契沖書入」同様に、古今六九一番の素性歌が本歌とされている。いま該当歌を掲げる。

いまこむといひし許に長月のありあけの月をまちいでつる哉

（古今・恋四・素性・六九一）

この本歌の認定は『美濃』に先立つ先行注においては一般的であったもので、磐斎『増抄』では

増抄、是も素性がいまこむとの歌をおもへるにや。わすれずいまこむといひしは、偽にてきもせず、そのよのなごりには月ばかり、そのごとくにめぐりきにけりと也。

とあり、季吟の『八代集抄』も同様に素性歌を本歌と考える。

是も、〈今こんといひし斗の哥を用てなり。忘れじといひし斗に、其名残とて其逢契りし夜の月ばかりはめぐりきて、其人は影もなきよしなるべし。

本歌取歌としての解釈についても、磐斎と季吟とは同様の見解を示していると認めてよいだろう。磐斎は、本歌で詠まれた「忘れずにすぐに行こう」と言ったのは偽りで、来ることもなく、その約束を交わした夜の名残としての月だけが、その時と同じように巡ってきた、とする解釈を述べている。また季吟も、「忘れることはない」と言った言葉だけで、その名残として会うことを約束した夜の月だけが巡り来て、約束した人は影もない、と自身の解釈を述べる。両解釈共に本歌で約束を交わしたという詩的世界を前提にして、新歌ではその約束が果たされないまま男は訪れず、その夜の月だけが巡ってきたという解釈であり、（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取という視点からの解釈であり、この点は『美濃』のように拾遺四七〇番歌を（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取と考えたものと変わらない。

その上で、磐斎と季吟とで異なる解釈上の対立点は、（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取の視点を取るか否かであると見なすことができる。磐斎は「わすれずいまこむといひしは」と述べ、素性歌から有家歌において直接摂取されていない「いまこむと」という意味内容を積極的に読み込んでいるのに対し、季吟は「忘れじといひし斗に」と述べ新古今歌の詞つづきにそのまま沿った記述をしており、「いまこむと」を有家歌の意味内容を記述する詞としては用いていない。解釈の傾向としては（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取という観点を持つ磐斎『増抄』の方が宣長の解釈に近いことになる。そしてこの相違点こそが宣長の本歌取歌解釈においては重要であると言える。

新古今歌の本歌取歌解釈一般において（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取という視点を取るか否かで宣長の解釈は、「詞を取る本歌取」として規定した正明の本歌取解釈と明確な対立を示していた。いま有家歌に対する『尾張』の注釈を見ると、本歌を『美濃』と同様に拾遺四七〇番歌とした上で、宣長の注釈の前半部に対して次のように述べている。

本歌はかやうにむつかしく取ものニあらず。忘るといひ、月といひ、めぐりといふが、本哥の詞なり。さて忘るなよをわすれじとよめるは、一首の活用にて、いかやうにも取なす也。一首の意は、月を見て忘れじといひし事のある、其なごりなりとて、かの契し夜の月がめぐり来たる事よとなり。

正明は宣長の本歌取歌解釈について「本歌はかやうにむつかしく取もの〝あらず〟」と述べるように、その解釈を屈折したものに過ぎるという見解を表明している。一首全体の趣意としては季吟に近い解釈を行っていることが容易に見て取れるだろう。ここでさらに着目したいのは、「さて忘るなよをわすれじとよめるは、一首の活用にて、いかやうにも取なす也」と述べている点である。宣長は拾遺四七〇番歌を本歌として「忘れじ」という詞を導き出すために、初句「わするなよ」に「わするなよ我も忘れじ」という「たがひにいへる意」が含まれているという理路をわざわざ設定したのであり、その理路を迂遠だとするのが正明の見解であることが改めて見て取れるだろう。正明にとって有家詠に詠み込まれた「忘れじ」という詞は本歌「忘る」の「活用」であるに過ぎない。この見解の対立が、より一層、宣長にとって（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取という本歌取歌解釈の視点が特異な重要性を持っていたことを浮き彫りにするだろう。

以上を踏まえた上で、では季吟から磐斎へ(9)、そして『美濃』へと至る本歌取歌解釈と本歌認定の異同が、いかなる推移を辿ったのかを考えてみたい。古今六九一番歌を本歌とする季吟は（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取という視点のみを読み込む一方で、同じく古今六九一番歌を本歌とする磐斎はそこに加えて（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取の視点を取り入れていた。拾遺四七〇番歌を本歌とする『美濃』は結果的に（C）と（J）の視点から本歌を解釈したわけだが、それではなぜ磐斎的な読み方として古今六九一番歌を本歌としなかったのであろうか。

再び磐斎『増抄』を見てみよう。

増抄、是も素性がいまこむとの歌をおもへるにや。わすれずいまこむといひしは、偽にてきもせず、そのよのなごりには月ばかり、そのごとくにめぐりきにけりと也。

波線を付した「わすれず」は磐斎が本歌とする古今六九一番歌には詞としては現れないもので、有家歌の詞に基づくものである。この詞の由来を強調したのが拾遺歌を本歌とする『美濃』の解釈であると考えることが出来るだろう。宣長の解釈としては「忘るなよ」という詞の中に、「わするなよ我も忘れじ」という作中主体の心中での詞の連なりが含まれているということを強調しているのである。本歌の「忘るなよ」と新歌の「忘れじと」とは作中主体による一連なりの表現であり、詠み出された和歌の詞の表面には表れることはないが、しかし内容としては含み込まれていると考えられる表現（それはもはや「表に現れる」という意味ではないものだが）を読み込む解釈にこそ（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取という分析視点を持ち込む宣長本歌取歌解釈における傾向性があると考えられる。

このような（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取の傾向性を「宣長手沢本書入」と『美濃』の本歌異同において端的に示すことのできる例が新古今四九三番歌（秋下・源通光）である。

河　霧

明ぼのや川せの波のたかせ船くだすか人のそでの秋霧

めでたし、下句詞めでたし、二三の句は、船をくだせば、船にあたる波の音の高きをいふ、人の袖の秋霧とは、経信卿母の歌に、〈明ぬるか川せの霧のたえ〴〵に遠方人の袖の見ゆるは、とあるをとりて、花やかによみなせる也、されば此句は、袖のたえ〴〵に見ゆる意なるを、其詞をば、本歌にゆづりて、人の袖のといふ詞にて、本歌を思はせたる物なり、然るを或抄に、袖は霧にかくれてあるといふことなりと注せるは、いとをさなし、一首の意は、波の音高く聞え、又霧に人

の袖のたえ〳〵見ゆるにつきて、高瀬舟をくだすにやと思へるさまなり、

『美濃』では本歌を後拾遺歌に取っている。

あけぬるかかはせのきりのたえだえにをちかた人のそでのみゆるは　（後拾遺・秋上・源経信母・三二四）

「袖のたえ〳〵に見ゆる意なるを、其詞をば、本歌にゆづりて」という評釈からわかるように、（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取の解釈の視点を明瞭に示す注釈である。

さてこの歌に関して「宣長手沢本書入」では「契沖書入」をそのまま引き写し、『夫木和歌抄』掲載歌二首を記すに止まる。また先行注においても『美濃』で引かれているような後拾遺歌に言及するものはない。この歌について正明は

明の字、川、瀬、霧、人袖と云もじはあれど、かく物遠き哥をとりたりとも思はれず。詞を本歌にゆづるは、山鳥の尾のしだりをのに、永き夜といふ事をゆづり、（ママ）たりとある如く、聞えず。逆の義也。

と述べているように例によって、（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取としての解釈を示す「本歌にゆづる」という本歌取解釈を認めていない。このことが翻って、宣長における（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取という本歌取解釈の視点の重要性を証明することになるだろう。先行注において指摘のない本歌を認定し、後に正明には否定されるような本歌取の視点を読み込むことは、本歌取歌解釈において、（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取の視点を持ち込むことで整合的な解釈としようとする宣長の傾向性を見て取ることが出来るのである。以上のような本歌取歌解釈の態度を、宣長における「心を取る本歌取」の重視として規定するのである。

第三節　縁語的連想による本歌取への傾向

前節では宣長本歌取歌解釈における「心を取る本歌取」への傾向性として、（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取と（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取という解釈を行うあり様を、「宣長手沢本書入」と『美濃』とにおける本歌認定の相違の分析を通して示した。本節では、宣長本歌取歌解釈のもう一つの特徴である（H）縁語的連想による本歌取に関して、同様の手法で見ていくことにする。まずは『美濃』における新古今五二二番歌（秋下・寂蓮）の評釈を見よう。

摂政大将に侍けるとき百首歌よませ侍けるに

かさゝぎの雲のかけはし秋くれてよはには霜やさえ渡るらん

鵲の雲のかけはしとはいかゞ、雲井のといふことなるべきを、さはいひがたき故の、しひごとなるべし、又古歌に〳〵おく霜の白きを見ればとあれば、其うへをめづらしくいはむこそほいならめ、たゞ霜やさえ渡るらんとのみにては、いとよわく、何の詮もなし、渡るといふ橋の縁のみ也、

本歌

かさゝぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける　（新古今・冬・大伴家持・六二〇）

まず本歌の認定から確認すれば、この寂蓮歌に新古今六二〇番の家持歌を本歌として設定するのは、「契沖書入」には見えず「宣長手沢本書入」も何れの歌にも言及していない。その他先行注釈においては磐斎が以下のように触れるにとどまっている。

増抄云、家持、かさゝぎのわたせるはしにをく霜のしろきをみれ

ばよぞ更にける、これをおもへるなるべし。かさゝぎのくものかけはしとは空の事也。

寂蓮歌に対する宣長の評価は全体的に厳しい。上記『増抄』の「かさゝぎのくものかけはしとは空の事也」の記述に基づく宣長の判断であろうが、本来なら単に「雲井の」と言うべきところを、字数の関係から強いて「鵲の雲のかけはし」と詠んでいると難じている。そして、本歌との関係については、「古歌に〳〵おく霜の白きを見ればとあれば、其うへをめづらしくいはむこそほいならめ、たゞ霜やさえ渡るらんとのみにては、いとよわく、何の詮もなし」と述べ、本歌家持詠を踏まえて「めづらしく」歌を詠み出そうとしたものであると考えている。窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』[10]（以下、『完本評釈』）では、当該寂蓮歌を『美濃』同様に、新古今に入集した古歌家持詠を本歌とする本歌取と見た上で「事は同じである。ただ、夜のふけるのを、秋の暮れることに変えているだけである」と述べる。仮にこの歌の本歌取歌としての解釈を「夜のふけるのを、秋の暮れることに変えているだけ」と言うのであれば、この観点自体は本稿の整理では（B）本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取として捉え得る。しかし宣長は本歌を「めづらしくいはむ」とした寂蓮歌を内容の面では評価していない。「いとよわく、何の詮もなし」なのである。

その場合、本歌はいかに機能しているのかと言えば、宣長の評釈に従う限り縁語関係を導くために要請されているとしか考えらない。寂蓮歌の下の句「霜やさえ渡るらん」は「渡るといふ橋の縁のみ」であるという。本歌における「かさゝぎの渡せる橋」における「渡る」と「橋」との関係は、「鵲が渡した橋」と考えられるように論理的な意味の次元で明確な結びつきを持っており、これをふつう縁語関係とは言わない。一方で寂蓮歌では「渡る」は「冴えわたる」の意に詠みかえられる。新歌でいわば補助動詞として用いられる「わたる」は「橋」と論理的な意味の結びつきを持たないことではじめて、寂蓮歌において縁語として機能することになるのである。本歌の詞の摂取としては（A）本歌の詞の意味内容を変容させて新歌に利用する本歌取と捉えられ、それゆえ新歌では「渡る」と「橋」に縁語関係が生まれるのである。宣長による本歌取歌解釈の分析的諸視点を前提にすれば、本歌である家持歌は新歌にとって縁語関係を成立させる典拠として機能していると考えることができる。

以上を本歌認定の相違という観点から捉え直してみる。前述の通り、「宣長手沢本書入」を含め先行注においては寂蓮歌に対して本歌が指摘されることは概してなかった。磐斎『増抄』において家持歌が本歌として言及されるが、それも本歌の指摘と語義の説明に過ぎないものであった。そのような解釈史の中で、宣長がこの寂蓮歌を本歌取歌として解釈をしようとした動機は、内容面での新規性が特にないと判断した歌に対して、本歌を設定することで、本歌の詞「わたる」（これは本歌では縁語としてみなされない詞であった）を新歌において「橋」との縁語関係を結ばせるためであったと考えられるだろう。「宣長手沢本書入」と『美濃』との本歌認定の相違という事実を基にすることで、当該寂蓮歌に対する『美濃』における本歌の設定が縁語関係を結ばせるという動機のもとに行われたことが浮かび上がってくる。

本歌認定の異同が（H）縁語的連想による本歌取の読みに関わっている例として新古今一四五五番（雑上・藤原定家）を見よう。

近衛づかさにて年久しくなりて後、うへのをのこども大内の花見にまかりけるによめる

春をへてみゆきになる、花の陰ふりゆく身をも哀れとやおもふめでたし、初二句は、春ごとの行幸に供奉して、なれたる

よし也、近衛づかさは、必供奉すること也、三の句、陰なるゝ
といふによし有、さてみゆきといふに、花の雪をかねて、そ
の縁にふりゆくといひて、我身の昇進もえせで、年のふりゆ
くにいひかけたり、身をものもじは、わが花の雪とふりゆ
くをあはれとおもふにつけて、花も又我をあはれとや思ふと
いふ意なり、〳〵もろともに哀とおもへ山ざくら云々、

本歌

もろともにあはれと思へ山ざくら花よりほかに知る人もなし

（金葉・雑上・行尊・五二一）

当該歌に関しては諸注で金葉集歌を引いているものは見当たらず、「契沖書入」や「宣長手沢本書入」にも記載されない。宣長の注釈に沿って当該定家詠を解釈すると、「みゆき」が「行幸」と「み雪」の掛詞となっており、その「みゆき」に落花を象徴する「花の雪」が兼ねられているとする。本歌から摂取された「花」は、定家詠では「花の雪」を含意することで、その縁である「ふりゆく」を導くことになる。「ふりゆく」も掛詞として、花の雪の「降りゆく」を含みながら、年の「経りゆく」へと意味を乗り換え、擬人法的に「花」の視点に立ちながら花自らの落花をあはれと思い、また作中主体が年老いていくのをあはれと思っているのだろうか、という解となっている。

意味や修辞の解釈に関して諸注と大きな齟齬がない中で、あえて『美濃』で金葉集歌を本歌として記載したのは、本歌の意味内容を積極的には引き継いでいない点を鑑みるに、偏に「花」という詞の摂取から、新歌における（H）としての縁語的連想による詞つづきを強調する意図があるものと考えられる。

最後にもう一例、新古今一三二六番歌（恋四・俊成卿女）を見てみよう。

被忘恋

露はらふ寐覚は秋の昔にて見はてぬ夢にのこるおも影

いとめでたし、詞めでたし、露はらふは涙にて、露といへるは、秋の縁なり、秋の昔とは、秋は人にあかれたる今のことにて、其今よりいへば、いまだ人のかはらで、逢見しことは、昔なるよしなり、然らばたゞむかしにてとのみいひてもよかるべきに、秋のといへるは、いかにといふに、此歌にては、秋のといふことなくては、逢見し事は昔にて、今はあかれたる意、あらはれがたければ也、一首の意は、人にあかれ忘られたるころ、夢に又逢と見たるが、見はてもせず、早くさめたる時によめる意にて、其夢さめたれば、もとのあかれたる時にて、夢に見たる逢事は、昔のことにて、たゞ其夢の面影のみ残りて、涙をながすとなり、此歌を、契沖が、女の歌めかずといへるは、いと心得ず、【後撰〳〵はらふばかりの露や何なり、古今〳〵見はてぬ夢の覚る也けり、】

改めて本歌の全文を示す。

涙河流す寝覚もある物を払ふ許の露や何なり

（後撰・恋三・読み人しらず・七七一）

命にもまさりて惜しくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり

（古今・恋二・忠岑・六〇九）

該当歌における「宣長手沢本書入」では「契沖書入」同様、本歌の記載はない。先行注においても本歌の記載はなく、この一三二六番歌に対しては宣長が『美濃』において自身の解釈に基づき二首の本歌を付け加えたことになる。久保田淳『新古今和歌集全注釈』(11)（以下、『全注釈』）では参考歌として同二首を掲げるにとどまる。宣長は自身の評釈で「露はらふは涙にて、露といへるは、秋の縁なり」と言って

いる。このことは、本歌として付け加えた後撰七七一番歌から摂取した「露」に対して本歌では「秋」を詠みなすことで縁語関係を成立させる、という（H）縁語的連想による本歌取の読みを行っていることを示している。

前掲野口や渡部によって宣長の古典解釈態度に関する「縁語」に対する強い志向性が指摘されており、我々もまた本歌取歌解釈の視点として（H）縁語的連想による本歌取を析出していた。その上で、本節では「宣長手沢本書入」と『美濃』とにおける本歌認定の相違の分析を通して、先行注釈における解釈や本歌の認定と異なる見解を提示することで、（H）縁語的連想による本歌取が、単に宣長の本歌取歌解釈における分析的視点の一つにとどまらず、一首に本歌とその詞を想定することで、縁語関係を切り結ばせ、和歌として成立させようとする様を示した。

第四節　（G）本歌を二首取る本歌取による分節的解釈と（E）心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取の視点の消滅

本節では、まとまった分量ではないものの、「宣長手沢本書入」の段階から『美濃』へと移行するに当たり、本歌の認定が変更されたもののうち、有意義な点を認められるものを取り上げる。まずは、（G）本歌を二首取る本歌取の視点を加えて、本歌と新歌との連なりを、より分節的に捉えるよう解釈の変更を行ったとみなせる例として、一七九番、俊成女歌（夏）を見る。

夏のはじめのうた

をりふしもうつればかへつ世の中の人のこゝろのはなぞめのそでめでたし、本歌〈うつろふ物は世の中の人の心の花にぞ有ける、〈世中の人の心は花染の云々、初二句は、人の心のかはりやすきことは、男女の中のみならず、をりふしのうつるにも、うつりかはるよといへるにて、花染衣をすてて、夏衣になれることをいへる也、

本歌

色見えでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有りける

（古今・恋歌五・読人しらず・七九七）

世中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける

（古今・恋歌五・小野小町・七九五）

当該歌について「契沖書入」では以下のような注釈的記述のみで、本歌の指摘はない。

花ぞめとは、月草の花にてそむるをいへり。花の色にそめしたもとゝよめるは、その心桜色なれば、今のつゞけやう、似たる事とてあやまれり。

「宣長手沢本書入」は、契沖の注釈を引き写した上で、「契沖書入」にはない古今七九七番歌を書き加える。これは磐斎『増抄』において指摘されていたものである。また『美濃』に至ってさらに、季吟『八代集抄』において指摘のあった古今七九五番歌を加えている。

『美濃』は一首の解を、人の心が移り変わりやすいのは、男女の仲だけではなく、季節の移り変わりにも伴うものであり、春衣から夏衣へと移り変ることをも指す、としている。「宣長手沢本書入」において引かれていた古今七九七番歌にのみ依拠した場合でも、本歌における趣意の中心であった「人の心の花」が、新歌では「男女の仲」へと変更されたと考えられ、（B）本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取と整理できよう。『美濃』では、これに加えて『八代集抄』が指摘した古今七九五番歌が本歌として認定され、花染の移ろいやすさ（本歌では季節の移り変わりとは無関係で、単に褪せやすい染色法

による衣の移り変わりやすさを象徴したものである）が織り込まれる解釈となっている。『美濃』において、新歌に付加された意味内容は「人の心が季節の移り変わりと共に変わること」と「春衣から夏衣へと変わった」という二点である。古今七九七番歌（「宣長手沢本書入」の本歌）における「花」は、見えない心の顕現の象徴であるが、古今七九五番歌（『美濃』で追加された本歌）における「花」は「花染」という詞つづきとなることで「褪せやすいもの」の象徴となっている。「花」が具象化され、それがさらに「褪せやすく移ろいやすいもの」という象徴的観念を想起させるという理路が整えられる。

俊成女詠の本歌取歌としての『美濃』の解釈は、本稿で採用する分析的視点では（B）本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取の範疇に含まれる。しかし、「宣長手沢本書入」時の本歌であった古今七九七番歌のみに基づいたとしても前述したように（B）本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取として読むことができたのであった。その上で、『美濃』において（G）本歌を二首取る本歌取の視点から古今七九五番歌をも本歌に加えたことにより、解釈の分析的視点としては、本歌と新歌との連なりを、より分節的に捉えようとしている、すなわち「人の心が季節の移り変わりと共に変わること」と「春衣から夏衣へと変わった」という二重の新たな視点を新歌に見出していると言えるだろう。新古今一七九番歌に対する本歌の追加は、宣長の本歌取歌解釈における本歌と新歌との細かな連なりを読み込む姿勢を浮かび上がらせる。

本歌の選定に変更があるものの中で、本稿において最後に見ておきたいものとして、（E）心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取の視点の消滅を示しているような例を挙げたい。式子内親王の二五六番歌（夏）である。

百首歌奉りし時

まどちかき竹の葉すさぶ風の音にいとゞみじかきうたゝねの夢

朗詠に、風生レズル竹ニ夜窓間ニ臥ス、初句うたゝねによし有、二の句すさぶといふ詞おもしろし、ひたすら吹にもあらず、をり〳〵そよめくさまにて、夏のよによくかなへり、よのつねならば、そよぐとよむべきを、かくあるにて、殊にけしきあり、一言といへど、なほざりにはよむべからず、心を用ふべきわざなり、四の句はさらでだに夏の夜にてみじかき夢なるにいとゞなり、

「契沖書入」では万葉歌と和漢朗詠の詩が掲げられて、「宣長手沢本書入」も両者に従い、それぞれ「万十九　家持　わかやとのいさゝむら竹ふく風に声のかそけきこの夕かも」、「風生竹夜窓間卧　月照松時臺上行」として書き入れられている。『美濃』においては一転、他の先行注に従い和漢朗詠歌のみを本説とすることとなる。新歌の意味内容に留意した本歌の認定と考えられるが、万葉歌を本歌とした場合はどのような解釈が可能であろうか。

まず指摘しておくべきこととして「契沖書入」における万葉歌の表記が「ふく風に」となっており、「宣長手沢本書入」もその表記に従っていることである。このことから「宣長手沢本書入」が「契沖書入」の引き写しという性格を強く持つことが傍証される。契沖『萬葉代匠記』において当該歌は、「布久風能（フクカセノ）」[12]となっており、「契沖書入」では「に」、『萬葉代匠記』では「の」という相違を示していることから、そのことがうかがえるのである。当該歌の『萬葉代匠記』の注釈は主に語注であり、一首全体の趣意に及ばない。賀茂真淵『万葉考』では「春風のうら〳〵に音しづかなるにめづるなりけり」[13]と述べる。このことから考えるに当該万葉歌は春愁を思い、春の一日を詠う趣意をも

つものである。

万葉歌を本歌とする本歌取としての解釈を進めるなら、両首に共通する詞は「竹」と「風」のみであるが、趣意にまで考えを及ぼすと「自らの邸宅に生える竹に吹く風」及び「その音が幽かである」という内容はここで問題としている新古今二五六番歌と本歌としての万葉歌において一致する。さらにその観点を推し進めると、新歌では下の句に、夏の夜の短さが加えられており、（B）本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取の視点として詠みなされていると言える。しかし一方で、万葉歌を本歌と想定した場合、詞の摂取が極めて断片的かつ、わずか二語に留まっている点が注目される。この点を考慮すると当該万葉歌を本歌とした際の本歌取歌解釈の分析的視点は、『草庵集玉箒』の本歌取歌解釈を分析した際に見出し得た（E）心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取[14]に符合する。

結局、『美濃』では万葉四三一五番歌が本歌として認定されることはなかった。そして当該万葉歌が本歌とされた場合に当てはまると思われる（E）心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取の解釈が、『玉箒』から『美濃』へと移行する際に、その全体において姿を消しているという事実がある。この事実から推論される事態は以下の二つであろう。一つは、宣長が『新古今集』の手沢本に「契沖書入」を見ながら、相当程度機械的に書き入れを行っていた場合、自身が新古今歌には存在しないと考えていた（E）心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取の視点からの本歌取歌解釈となる万葉歌も機械的に書き入れており、『美濃』を執筆する際に自らの新古今歌における本歌取歌解釈の基準に則って、本歌として採用しなかったという可能性。もう一つには、「宣長手沢本書入」の段階で、自らの判断も相当程度踏まえて本歌の認定を行っていた場合、一度は「契沖書入」を参考にしながら（E）心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取の視点として万葉歌を本歌としたが、『美濃』の執筆にあたって考え直し、最終的に本歌としての採用を見送った可能性。手沢本への書き入れがどの程度機械的に行われたかについては、明らかに機械的な部分もあれば、そうでないと思われる部分もあるとしか言えず、当該新古今二五六番歌について明確にどちらであったのかを判断することはできないと言わざるを得ず、それゆえどちらの可能性も積極的に主張することはできない。しかしながら宣長の（E）心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取の本歌取歌解釈に関する考察をここまで伸ばすことができたのは、「宣長手沢本書入」と『美濃』との本歌認定を比較することで初めて可能となったことであると言えよう。

おわりに

「宣長手沢本書入」と『美濃』との本歌の認定に関する相違を、本歌取歌解釈の分析的視点を踏まえて考察したことによって、宣長の本歌取歌解釈における傾向性が明らかにできたことと思う。その傾向性とは本歌取歌解釈の分析的視点に沿って言えば、（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取と（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取を主軸とする「心を取る本歌取」への傾向性、及び（H）縁語的連想による本歌取への傾向性である。そしてこのことは、前掲拙稿において『美濃』の本歌取歌解釈を分析した際に指摘したことと一致している。『美濃』という同一の注釈書に従って分析をしている以上、その結果は特に有意義なものではないと思われるかもしれない。しかし、本稿では、もともと本歌として認定されていなかった先行歌が、（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取

や（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取、あるいは（H）縁語的連想による本歌取の解釈を導くためにあえて本歌として導入された様を示すこともできた。そのことによって、以上で述べた宣長の本歌取歌解釈における特定の傾向性に、文献的な裏付けを与えることができたといえる。

また、数量的な有意性はないものの、（G）本歌を二首取る本歌取として本歌を二首考え合わせることによって、本歌取歌を構成する要素を、より細かく分節して解釈しようとする例を見出せたことや、また『草庵集玉箒』と『美濃』との本歌取歌解釈の分析的視点における（E）心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取の視点の有無、という事態に対する文献学的な考察の素材を提供し得たことは、本研究の意義と言えるだろう。

以上の分析を通して、宣長が本歌取歌を解釈する際に、いかなる思考に基づいていたのかを明らかにすることができた。そしてこのことは、今後筆者の目指す宣長の古典注釈と彼自身の詠歌態度の比較研究に明確な基盤を準備したと言うことができる。

注

（1）高橋俊和「和歌のしたてやう」『本居宣長の歌学』（和泉書院・一九九六年・八五頁）

（2）藤井嘉章「『草庵集玉箒』における本歌取解釈の諸相」（『東京外国語大学日本研究教育年報』第二四号、二〇二〇年）、及び同「本居宣長の本歌取論―『新古今集美濃の家づと』評釈を通して―」（『言語・地域文化研究』第二五号・二〇一九年）

（3）寺島恒世「気韻の和歌　新古今注『尾張廼家苞』の要諦」（鈴木健一編『江戸の「知」――近世注釈の世界』森話社・二〇一〇年・二三一頁）

（4）野口武彦「本居宣長における詩語と古語」（『江戸文林切絵図』冬樹社・一九七九年）、及び渡部泰明「本居宣長と『新古今集』」（『中世和歌史論　様式と方法』岩波書店・二〇一七年・四四八―四四九頁）

（5）前掲藤井（二〇一九年）。（A）からの（J）の本歌取歌解釈の分析的視点の詳細な規定は、紙幅の関係から当該拙稿を参照されたい。

（6）藤井嘉章「本居宣長手沢本『新古今和歌集』における本歌書入」（『言語・地域文化研究』第二四号・二〇一八年）

（7）田中康二「先行注釈受容の方法」（『本居宣長の思考法』ぺりかん社・二〇〇五年）。なお『新古今集古注集成』（笠間書院）において「近世旧注編」に配される細川幽斎『増補新古今集聞書』を古注として記述しているのは、当該田中論の指摘に拠る。

（8）本歌拾遺四七〇番歌の初句「忘るなよ」に対して、新歌では「忘れじと」とあることから一見、本歌の願望表現に対する新歌での応答として捉えることが出来るようにも思われる。もしそのように考えると、本稿の整理では（D）本歌に応和する本歌取ということになる。しかし宣長の解釈としては「忘るなよ」という詞の中に、「わするなよ我も忘れじ」という作中主体の心中での詞の連なりが含まれているということを強調しているのであり、本歌の「忘るなよ」と新歌の「忘れじと」とは、一つの表現であり、応答関係にあるものではないと考えられる。むしろその読みにこそ、あえて（J）摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取という分析視点を持ち込む宣長本歌取歌解釈における傾向性がある。

（9）文献上の年代からすれば当然、加藤磐斎『増抄』が北村季吟『八代集抄』に先行しているわけであるが、本稿では宣長の側から見た解

釈視点の推移という視座を重視して、以上のような表現とする。

(10) 窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』(東京堂出版・一九六四―一九六五)

(11) 久保田淳『新古今和歌集全注釈』(角川学芸出版・二〇一一―二〇一二年)

(12)『契沖全集　第七巻』(岩波書店・一九七四年)に拠る。歌番号は旧国歌大観では四二九一。

(13)『賀茂真淵全集　第五巻』(続群書類従完成会・一九八五年)に拠る。

(14) (E) 心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取とは、もともとこの分析的視点を措定する際に参照していた『愚問賢注』「本歌のとりやう」において「たゞ詞一つをとりたる歌」に基づくものであった。詳細は前掲拙稿「『草庵集玉箒』における本歌取解釈の諸相」の参照を請う。

〔付記〕

本文中の本歌は『新編国歌大観』に拠り、新古今歌の表記については、『美濃の家づと』(『本居宣長全集　第三巻』(筑摩書房・一九六九年、所収)に拠った。『新古今和歌集』の古注釈は全て『新古今集古注集成』(笠間書院)に拠った。

本稿は第三十七回年鈴屋学会大会において発表受理(後、開催中止)された原稿を基に作成し、二〇二〇年十二月に東京外国語大学へ提出した博士論文の第五章を改稿したものである。また、本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費(課題番号：202100022)による研究成果の一部である。

(ふじい　よしあき　東京外国語大学　非常勤講師・日本学術振興会特別研究員PD)

Motoori Norinaga's Choice of Honka In His Interpretation of Shinkokinwakashu:

Through the Comparison Between His Handwritten Honka Notes in Personal Copy of Shinkokinwakashu and Mino no Iezuto

FUJII Yoshiaki

KEYWORDS: Motoori Norinaga, *New Collection of Ancient and Modern*, allusive variation, Handwritten Notes in Personal Copy, *Mino no Iezut*

This paper begins with a quantitative analysis of the differences between the poems of Honka in Motoori Norinaga's Handwritten Honka Notes in Personal Copy of *New Collection of Ancient and Modern* and ones in *Mino no Iezuto*, his commentary on the poems in this collection. I will then qualitatively analyze the tendency of Motoori's attitude toward reading the poems composed in such a way as allusive variation in terms of the contents and rhetorical expressions in his interpretation.

As a result, this study shows that Motoori Norinaga's attitude is to actively read the semantic content and rhetorical relations of Honka into the poems of allusive variation.